

長沼六一先生追悼文集

目次

口 絵

はじめに

坪内 健 9

I 支えて、支えられて 11

◇会報より 13

自己紹介 15

退局の記 18

私の持病のこと 25

寡黙について 33

少年が主役の映画 39

精神科医二十年 45

支える、支えられる 52

ガリバー旅行記のような 57

映画を観て泣く・3 65

花 72

支えられて 74

どうでもいい前書きがますます長くなる——映画を観て泣く・8 77

半世紀振りに漱石を読む——映画を観て泣く・9 90

結論のない日々 99

多謝、多謝 102

病室の窓 104

まだまだ広く動ける——映画を観て泣く・13 107

◇年賀状より 121

平成五年 123

平成七年 124

平成二十年 125

平成二十一年

126

平成二十四年

127

◇追悼文より

129

長沼六一先生（六ちゃん）、暫くのさようなら

大島正親

130

長沼六一先生を偲ぶ

大江美佐里

136

追悼、長沼六一先生を偲んで——映画を観て泣く・シリーズ完結編

原口扶実子

144

Ⅱ 六一先生の思い出

149

◇久留米大学関係

151

長沼六一先生を偲んで

橘 久之

152

あたたかい長沼六一先生への大切な思い出

大島正親

156

六ちゃん先生の思い出

小島居湛 159

長沼六一先生を偲ぶ

西川 正 162

長沼六一先生へ

大江美佐里 167

長沼先生との思い出

安元真吾 170

◇松ヶ丘病院関係 173

無題

岸 敏郎 174

今も生きている長沼六一先生

前田孝弘 175

A Day in the Life

坪内 健 178

無題

藤木 僚 181

ライク・ア・ローリング・ストーン

長沼 清 183

長沼六一先生へ 185

青木幸子・秋吉正広・石田 元・石山幹代・大上陽子・

大庭智恵・岡崎美智子・岡崎美津子・鎌谷順子・

履歴書

229

河澄良子・桐田恵美子・桐田光子・小松良成・下森里美・
篠原慎典・島本光枝・下瀬育子・城市幸忠・田中照子・
田原栄二・豊田富喜美・豊田政幸・長尾由美子・
中島あけみ・中島知絵・中嶋真由美・中村美代子・
西川友司・西坂真弓・濱田悦子・檜谷佳誉子・廣瀬正樹・
福原真由美・福田賢司・古山直代・堀 幸子・枡本典子・
又賀智恵美・山田智浩・吉田俊郎・吉村陽子・和崎幸秀

わが友、六——あとがきに代えて

穎原嗣尚

235

はじめに

坪内 健

ずっとタイミングを計りかねていましたが、昨秋辺りからそれとなく口をそろえるように「そろそろ六一先生の追悼文集を」という話が出始めました。それとなく話が出たときには、「確かに今だよなあ」という気がしました。実際動き始めると、第I部に収めたい六一先生の文章が山のようにあり、一つひとつが名文・名作なので困りました。コンプリート版を望む声もあったのですが、実現に至りませんでした。すみません。

一方で、第II部の思い出話も追悼文集の大きな目的です。たくさんの御玉稿をいただき感謝いたします。それぞれに固有の六一体験がある一方で、それぞれの体験に「ああ、言いそう、言いそう」という共通項も多いように感じました。本当はもつともつと多くの方々の思い出話を集めて、こちらもコンプリート版を作りたかったのですが、実現できませんでした。すみません。

本当は遺された患者さんたちから聞く思い出話が一番泣けます。でも、そういうのはなかなか出版できませんし、語る患者さんたちの雰囲気までは表現できません。実は患者さんたちは、それとなく幸せそうに語ります。何かに包まれた感じですか。結局、そういう雰囲気全体が六一先生の遺産なのでしょう。雰囲気は不滅です。

ともかく文集が完成しました。コンプリート版を含めて、また別の企画があってもいいですし、それぞれの思い出で埋め合わせてコンプリート版に仕上げていただくのもよいかと思えます。結局この文集を開きながら飲み会になり、話は尽きず、永遠にコンプリート版はできないような気がします……。

平成二十七年九月

(松ヶ丘病院 院長)

I
支えて、
支えられて

◇会報より

六一先生は、久留米大学の同門会誌のはじめ、県内、院内の会報に多くの文章を残されています。年代順に読むと、六一先生の歩み自体が、六一先生が好きだった「北の国から」とシンクロするような気がします。益田での日々は、六一版「北の国から」だったのかもしれない。

自己紹介

何より先に、私はまず、奇妙奇天烈な六一なる名前のいわれを、語らねばならない。

昭和十八年、親父六十一才、還暦の秋、私はこの世に生を受けた。六十一才で息子を
作つた事に歓喜した親父は小踊りしつゝさつそく役場にかけてつけ、臆面も無く、戸籍に
六一と記入した。「俺は六十一才で息子を作つたのである。」と世間に誇示したのだ。まっ
たくの単細胞のなせる技であるが、それを又、黙認したお袋もお袋である。明治生れの女
が、いかに亭主に従順であつたかという見本であろう。以後、その名を押し付けられた当
人こそ、その精神的負荷は重大なものであつた。私の名を呼ぶ時、人はまず眉間に縦じわ
を寄せる。次に首をひねる。そしてしばし沈黙考し、おもむろにかつ重々しく、ナガヌ
ママツカズさんなどと呼ぶ。すると気の弱い私は、蚊の泣く様な声で、「いえ、それは単
純にロクイチと読んでいただいています。」と訂正する。名を呼ぶ人と、私も、これ
程に疲れさせるのは、すべて親父の責任である。

老いた精子から出来上がる子供は、モンゴリスムスカ天才のどちらかになる、との学説（？）に従えば、私は後者のやゝ前者よりの道を進んだらしく、幼少の頃よりその頭のヒラメキはずばらしく、六才にして早くも小学校入学、十二才にして中学校入学、十五才にして高校（修猷館）入学、十八才にして本学入学と、学問の道を驀進したのだった。

何故に私は医学の道に入ったのか。それは当人にも、アイマイモコとして不明である。当時酒を飲んで「医者はいいぞ。革命が起つても喰いはぐれがない。」などとわめいていたおぼえがあるから、理由はその程度の事なのかもしれぬ。

とにかく、私は本学医学部に入学した。入学後、私はその知的で冷たく、ニヒルな顔貌のせいであろうが、女性との縁がまったく無かった。よつてその破瓜期直後のモンモンたるもだえを、ラグビーに放散した。運よくもこのスポーツは、運動神経の発達している事を、余り必要とはしなかった。ともかく球をもつて走れば良いのだ。相手が走ってきたら、つかまえてひっくりかえせば良い。私は走り、そしてひっくり返した。よつて私は、ラグビー部での存在を許可された。そして六年間が過ぎた。

本年六月、私は医師国家試験に合格した。日本厚生省は、平気で私を医者にした。日本には、よつぽど医者が足りないのだなど、私はなげいた。なげきつゝも、俺は医者だと、大いばりで祝いの酒を飲んだ。

そして遂には本学精神科に入局した。何故に私は精神科を選んだのか。人間を追求したかったからである。……これは少々大げさ過ぎる。兄（現在島根県で開業）が入れ入れと云ったからである。……これは少々自分を卑下しすぎている。結局理由はその辺の処である。

以上のごとく、支離滅裂の私ではありますが、本年未だ二十五才、その若き脳細胞は、精神医学を、又人間学を吸収せんとして、満々たるエネルギーを貯えております。稲永教授他、医局、同門諸先輩先生方の御指導、御戒飭かいちよくを心よりお願い致します。（在教室）

* 初出 「同門会誌」 第一三号、一九六八「昭和四三」年

私の持病のこと

もう今では周りのビルの群れの中に埋没してそのありかさえもがはつきりとはしなくなりましたが、ほんの二、三年前迄は、博多駅を降りて中州の方へ走る車窓から、その建物の階屋にはりつけてあるおどろおどろしい真っ赤な色で書かれた巨大な一字は、常に私の目に強烈な力でとび込みこわごとくタクシーのシートに置いている私のその身体部位の感覚を改めて呼び起こしたものでした。その建物はヒサ屋大黒堂といいその赤い一字は「ぢ」という文字でした。あの一字が私の心に波風をたたせ、一方では自分と同じ苦しみを抱く人がこの世間にも多くいるのだというなぐさみを感じさせたのはいつの頃からだったのでしょうか。その時々そこはかとなし自分の在り様を書かしていただいた同門会誌の片隅に、今年は自分の持病のぢの話を書かしてもらおうと思いたったのは、これはもうそれを読まれる方々のひんしゆくをかう心情などはおかまいなしの、己れの一人よがりの気持ちばかりなのではあるのだけれど、まあこのことがある意味では自分の人生の節

目のような気もする訳で、あえてペンを取らしてもらった次第です。

あいまいな記憶の糸を改めてたぐってみれば、そもそもそれが萌芽し始めたのはまだ医師国家試験などへみたいな時代の飲んで遊んでうろつき回る、それはもう楽しいばかりの医学部の学生の頃だった気がします。私はラグビーをやっていたのですが、甘えの時代の名残の極度にスタミナのないこともあつて数回のダッシュの後には必ずやすぐにヘタヘタとへたりこみ、ベターつと尻を落として座り込んで、当時スタミナの申し子みたくだった三浦先輩が僕の周りを軽くジョギングしながら、「お前そんなことならたちまち痔になるぞ」と叱られていたのを思い出します。小さいくせにちよろちよろと動き止まない三浦先輩がうとましく、「何がちなどのなるうものか」と日射病になつた犬のごとくにへえへえよだれを垂らしながら、心の中で毒付いていたものですが、それがいつのまにやら二、三年後、確かに時々尻の谷間に何か異物のはさまつたような、何ともいえぬジクジクとした異感を感じるようになったのでした。確かに触れてみた指には何かポツツと出ているし、「ははあ、さてはこれがちというものか」と思い至りはするものの、話に聞くような痛みも苦痛もなく、指で押し込みさえすれば軽くひっこむし、ちよつとしつこい時にもボラギノールと一緒にやればいともた易く姿をかくし、とにかく俺のは痛まないぢなのだとゆうゆうとかまえていたものでした。今から思えば他のことも含めて、あの頃の

私は全てのことか自分の思うまゝに動くのだというおごりたかぶった青春の絶頂感の真つ只中にいた気がします。

しかしそのごう慢もその後長くはつづきませんでした。医者となつていくらかのうるおいを懐に夜の街に出て酒を飲むことを知つた主あるじに対して、それは少しづつ少しづつ反撃の刃やいばを向け始めたのではあつて、指で押し、薬をおし込むことをやってさえ、それはしぶとくじつくりと又頭を出し始めるようになり出しました。私の父も大痔主であつたらしく、父の立つていつた座布団の跡にいつもタオルが丸めて置いてあるのを幼き頃より見知つていた私は、さつそくにもそれを真似し始めたのです。太宰府の自宅から医局にまで通う車の中で、タオルはなくてはならぬ必需品となつていました。当分の間朝の車の四十分間は運転しながらのタオルでの持続押し込め療法とその当時の朝ラジオでかなりきわどくやられていた男女間のもめ事の身上相談を聞くことに費やされました。しかしその内程もなく持続押し込め療法は四十分では足らなくなり、医局での無駄口時間や患者との精神療法時間にも継続させざるを得なくなり、当時医局に居たチツチという医局長秘書が、私のひいた丸めタオルをいともきたな気につまみ上げ、たつぷりと花王粉石鹸の泡立つバケツの中に投げやる姿をしばしば認めるようになったのです。私の使うタオルが医局のものであつたが故に、彼女は窮乏した医局費のことを考えても、それを捨て去ることは出来なかつたの

でありましょう。

そしてそれが遂に恐怖の戦慄を爆発させたのは確か私が新婚まもなくの頃でありました。当時既にひつこまなくなつてしまつたそれに対してあきらめを感じつつ、私はまだまだそのれの眞の魔性にたかをくくつていた様なのです。ある日の夕、医局での何かの集まりのあとに、いつものごとく街に繰り出た私達は、その夜は皆何かしら一種の亢^{たか}ぶりの中にあつたようでした。道二先生などが路端のゴミのポリバケツに自分で入りこんでさわいんだりしたのがその夜だつたかどうかは別にしても、ふと気付いた私は流れ着いた飲み屋のカウンターの上によじ登り、上半身裸となりゴーゴーなど踊つていたのでした。一方には尚理性のある自分がいて今夜はあいつがかなりしつこくとび出して少し痛みもあるようだと警告を発してはいたのですが、酔つた方の私ははるかにそれをしのご勢いではあつたのでした。

アルコールとゴーゴーの振動によつて呼びさまされた翌朝のそれは、遂に猛烈な怒りの刃をふるいその主の私はタワーリング・インフェルノと地獄の黙示録が一しよくたになつたような状況の中で、將^{まさ}にステイブ・マックイーンのタフ・ガイぶりさえ及ばぬ程の主役を演ぜざるを得ぬはめにはなつていたので。立つては勿論駄目、正座してもあぐらをかいても寝てみても駄目。暖めるといいのではと風呂に入つても駄目。遂に冷やせ

ばいいかもと氷水の中に尻をつけてみてもやはり駄目。うつぶせになればいくらかでも充血がとれていいかと医学的知識を駆使して腹ばいになってもやはりその凶刃は襲いつづけて、とうとう私はウンウン涙を流しつゝ家中を走り始めました。最初は冷たく笑っていた新妻もいくらか事態の尋常でない様に気付いたのか、あたふたと薬局へとびこんでいき、とにかく持の特効薬をと頼んでアメリカ製の最新製品とかいう何とも得体の知れぬ代物を買って帰りました。即ち棒のようなものの中にヌレヌレとした液体が入っていてそれを冷蔵庫で冷凍して突っ込むと局所を冷やして痛みなどたちどころに消え去ってしまうというのです。一抹の不信感を抱きつつそれでも薬をもつかむ思いで、とにかく冷凍して水蒸気の出ているコチコチのそれをつつこんだ私は、たちまちにギャツと悲鳴をあげて更に一層のスピードで七転八倒家中をかけ巡ったではありません。

この頃の私は不埒にも大それた「痛みの感情的側面」などを学問の研究テーマにしており、自分が格好の対象者とはなった訳であり、痛みとは本当に他人とは共有できぬ孤独の^{たたか}斗いであり、それがいかに新婚ほやほやの新妻であつてさえ周りにいる奴が本当に憎らしく思えてくることや、又何でこの俺がこんな罰にさらされなければならないのかという恨みにさいなまれることなどを、それはそれこそ肌身に感じて知らされたのはありました。このことがあつて以来、それは増々むきになつて私を襲うようになり、主の私は唯々

戦々恐々として不安の日々を送り始めたのです。既に形はといえど何時の方向に痔核ありなどといった生やさしいものではなく、もう無茶苦茶に二十四時間全ての方向に根を張った花かんらんのごとき、あるいは七面鳥の鶏冠とじざかのごとき、アリコマンドを引き連れて登場する怪物その物並の不気味さではありました。

その頃時を同じくして私の母は食道癌にかかっていることがわかり、福大病院に入退院を繰り返えし出しました。久留米から福大への車の渋滞の中で私はずきずきと痛むそれを感じながら、母が飲みこんだ痛みを自分は消化管を通して外へ押し出すこともなく、出口のところまで止めたまゝにそれを共有し共に苦しんでいる自分を、なすこともなくハンドルを握りながらぼんやりと悲しくも自覚したりしたものです。

かくして出てはひっこみ、ひっこみでは出てその同一性を確立する迄の猶予期間を与えられていたモラトリアムぢは、ついに今年三月、その持主によって切取られて取られることが決断されました。その決断に至る道程はまず学生時代に見知った手術場の光景からして、女のお産のようなかっこうをして手術を受けねばならぬ手術の時の姿勢がいたく私の自尊心を傷つけることを克服することに始まりました。そして次には切った翌日にも食べるからには出るものは出るはずなのでその辺がいかに程に痛むものかという恐れでした。何はともかく一大決心をして入院した外科病棟の一日目、私と相前後して便所を訪れた或る男

との遭遇により、後者の不安は更にいやが上にも倍増された訳で、青白い顔をしたその男の、かもしだす雰囲気は全ての不幸を一身に背負った将に疫病神の様相ではあり、大きな洗面器をこ脇に（これにクレゾールを一二滴たらした湯を満たし、すませたあとチャブチャブと洗うのは後に知ったことではあるのだけれど）、やや前かがみに腰をなるべく動かすまいとのすり足で、私の入った隣の便所に入りましたが、まもなくにううつといつた苦痛の声を発したと思ううち、「あゝ地獄！」としぼり出すかのごとき呻きの声を発したではありませんか。出てきた疫病神をつかまえていつの手術かと問えば青息吐息の苦悶の表情から唯一言「おととい」とだけ。私は一寸先が闇の感じとはなりました。境遇が同じような気がして買い込んでいた死刑囚の小説を大いに共鳴しながら読んで読んで不安の二日が過ぎた後、私は麻酔の前処置でとろりとした感じのままに、白く冷たい手術場に運び込まれていました。「心配しなくても大丈夫ですからね」と励ましてくれる看護婦がブスであることに何故かは知らぬほつとした安堵感を感じていたのもつかのま、その慈母のごとき看護婦の命ずる手術の為の姿勢は、予想に反してあおむけではなくてうつぶせ、そして尻を持ち上げられた専門的にはジャックナイフとかいう、将におぼれて浮かぶかえるみたいな体位であり、これは又これで私の自尊心を一切ないがしろにするかっこうではありました。

かくしてメスの触れ合う音がカチャカチャとしてそのこと自体はかなりあっけなく終っ

たその後、先の疫病神と同じ「ウウツ地獄！」という数日が続いて後、私は無事我が家に帰ることが出来ました。家で父の帰りを待つ三人の子供も「お父さんはぢの手術しに病院にいつとるんと」と幼稚園の先生にいいふらす二番目の娘を間に、上の息子は早小学生、「そういうことを人にいうのは恥ずかしいんじゃないやけえのお」と私自身には未だ尚余りなじめぬ広島弁に似たこちらのアクセントで妹をたしなめる程成長しているのです。

モラトリアムぢとつきあつたこの数年間は、その主である私が結婚して子供をつくりこ山陰の田舎町の精神科のお医者さんとしての自我同一性を創り上げるまでの私自身のモラトリアムであつたような気がします。私のぢとの決別は母がいつて三年目の春でした。この間にいやも応もなく子の親としての役目を引き受けざるを得なくなつてきた私は、子としての役目をその分薄めていったような気がします。今の私に、母の痛みはすでに体内にたむろしてはおらず、唯心の奥底に深く沈んでうずきつづけているのですから。

*初出 「同門会誌」第二五号、一九八〇「昭和五五」年

支える、支えられる

大学の医局から派遣されてきた若い精神科医が、苦笑しつつこんな話をしたことがある。「うちの教授はとんでもないことをいうんです。先日新しい医局員を勧誘する席で『精神科の医者は楽ですよ。あれこれやって疲れた時には病棟に入って患者さんと話すんです。そしたら疲れがとれますから』なんて」。若い彼は大いに憤慨の口調でその話をした訳だが、聞いていた私は、彼の若い真面目さを羨む一方で、その教授の言葉に大いに共感もしていたのだった。

精神科医になつて二十五年、毎日毎日患者の相手をしてきて、最近とみに感じることは、神経症の患者からは、こちらのエネルギーが吸いとられるような気がするのに対し、分裂病の患者達からは、そのエネルギーを補ってもらっているように感じる。不思議なもので毎日外来をやっていると、何故か神経症の人の多くくる日と、分裂病の人の多くくる日、毎日の時の流れの中に波打っているような気がする。神経症の多い日はその後

ぐったりした疲労感がのこるのに、分裂病の人の多い日には、いくら昼食が遅れたにしろ何とはなしの充足感さえ感じてしまう。更にいえば、私は日頃の病院管理の多事雑務に追われ、その緊張とわずらわしさに疲れた時は、殊ことの外ほか病棟に入り患者ととりとめなく話をさせてもらうことにしている。何やら何とはなしに疲れが和むような気がするのである。将に先の教授の言に同じなのだ。

神経症の人々が私の疲れに手を貸すのは、彼らが日頃の私の仕事場での緊張感、更には私個人の生活上のわずらわしさをその背後にひきずっているからに相違ない。一方で分裂病患者が、「やっぱり分裂病を診てないと本当の精神科医じゃあない」という私自身の職業上の同一性確認の保証作業をやってくれているとも考えるが、どうもそんな表面的なものだけではなさそうだ。

やや大げさな言い回しを許してもらえるのなら、精神科医としての今の私を支えてくれるのは分裂病の人々であるといえる訳で、少なくとも私が彼らを支えているとは、おこがましくていえそうにない。本来こちらが支えねばならぬ人々に、自分の方が支えてもらっているなど、不埒ふせこの上ないが、それが実感だから仕方がない。勿論、急性期、再燃期の滅茶苦茶な状態の彼らに対しては、こちらも大いなるエネルギーを使う訳だが、それとても一段落してしまえば、あとには疲労感に勝る安堵感しか残らぬのも不思議である。

以下はかつて十六、十七年前、私が大学の医局をやめた時の話。その三年近く前から私は一人の十代後半の分裂病の少女の患者を受け持っていた。なにしろ可愛い少女でもあり、若くもあつた私は、入院当初はそれこそセシエーだ、フロム・ライヒマンだと大いに入れ込んで、絶対きれいに治して帰してやると張り切つて接したものであつた。ところがいくらこちらが頑張つてみても、病状は一切不変、仮面状顔貌のままに時に突拍子も無くしゃべることといえば「母さんを壁に塗りこめるのやめて……」。泣いているから早く出してやつて、「こんな蛇やトカゲのいるジャングルから早く出して——」といったことばかり取りつく島もなく、何の目処も立たぬままに月日ばかりが過ぎていき、既に諦めてしまつた私は支離滅裂の人格荒廃と片付けて、ほつたらかちに徹していた。最後の私の別れの報告にさえ、視線の会うこともなく虚ろな表情には勝手に薄い空笑が浮かぶだけではあつた。ところがこの彼女がいよいよ最後の教授回診のあと、教授をおっかけてきて「長沼医者をやめさせないで」と自分から一言いったというのである。私は驚き、柄にもなく感動し、そして最後にそれ迄の治療者としての自分を恥じた。以後の私にとって彼女の「やめさせないで」は様々な意味での支えになっている。

ここ数年、外来に四十歳の男性の分裂病患者が通つてくる。二十歳の時発病。以来近所の老婦人が自分に犬神をつけて、その犬神が体内に住みつき四六時中自分をさいいなんて苦

しくて苦しくてと訴えつづける。発病まもなくのまだ若いエネルギー溢れていた頃は、そのつらさにつられてひどい精神運動興奮を呈して数回の入院を繰り返している。彼は来る度に「今日はここに喰いついとる」といって、わざわざ私の背中や頭をさわってこちらに確認を迫る。最初は気持ち悪かったが、近頃はこちらも慣れて「ついでにそこ凝ってるからもんでくれ」と按摩してもらうことにしている。この人が「先生は僕が死ぬ迄には絶対きれいな体にしてやると約束したんじゃないやけえねえ。それを楽しみに生きとるんだから。僕より先に死なんでよ。無理しちゃいけないよ」と時に思い出したようにいう。「そんな大それた約束とかしたことはない」とか何とかいいながら私は内心大いに和んでいる。

数日前の午後、病棟で数年来入院している六十歳の分裂病の女性の相手をしていた。このところ「寝る前の薬が合わなくて心臓が苦しくてやれません。眠剤をやめて心臓発作の薬を下さい」と数分おきに詰所にやってくるものだから、看護婦達は皆うんざりしている。呼ばれた私も「また始まった」と半分上の空、聞くともなしにきいていたが、その患者がふっと一言、「先生はタフですねえ。午前中は外来して、午後からはまた私らの話を聞いてくから」とかいう。どぎまぎしながら「そんなおべんちゃらいつでも心臓グスリは出さん」とか言いつくろいつつ、私はやはり和んでいる。

挙げだしたら切りがない。事程左様に私はやはり分裂病の患者達から支えられているの

である。少なくともただ今退行期の危機の真只中であって、うつ病にもならず、自我の統合性の確立とやらを目指して毎日毎日あくせく生きていけているのも、彼らのお影だと心秘かに感じている。

*初出 「日精協誌」第一二巻第八号、一九九三〔平成五〕年

わが友、六——あとがきに代えて

額原嗣尚

先日一九六七年のアメリカ映画「卒業」をテレビで観るチャンスがありました。この映画は大学卒業のころ六（高校以来六一君のことを六、六、と言ってきましたのでここでも六と呼ぶことにします）と一緒に観に行った記憶があります。懐かしいなーと思いつつテレビを観ていましたが、そこで流れてくるサイモン&ガーファnkルの歌声を聞いているうちに切なくなっていました。はるか昔太宰府の長沼家の六の部屋でこのデュオのLPをよく聞いたことを思い出したからです。「サウンド・オブ・サイレンス」「明日に架ける橋」「コンドルは飛んで行く」など、何度聞いたことでしょうか。

そこで、皆さんがあまり知らないであろう六の音楽愛好歴について触れてみます。六が好きだったのはサイモン&ガーファンクルだけではありません。カーペンターズも好きで、そのLPもよく聞かされました。「イエスタデイ・ワンス・モア」「トップ・オブ・

ザ・ワールド」などの曲です。こう書いてくると、何となく憂いを含むアメリカン・ポップスの好きな若者像が六に重なってくるようです。ところがそれだけではありません。六はウエスタン・カントリー・ソングも好み、そのLPを何枚か持っていました。ハンク・ウィリアムスが好きで、その持ち歌「ジャンバラヤ」を六自身がギターを鳴らしながら歌っていたこともあります。六のだみ声、歌いまわしがカントリー・ソングに合っていたのでしよう、うま過ぎるぐらいうまかったです。ところで、日本の歌は好まなかったのかというところでもなくて、そこはかとなく哀愁の漂う歌はよく聞いたり歌ったりしていました。そうそう、津軽三味線の高橋竹山に惹かれていた時もあります。それから今思い出してもおかしなのは、どういうわけか奥村チヨの「終着駅」が気に入って、ウクレレをかき鳴らしながら二人して大声でこの歌を歌ったことがあります（一九七一年）。酔っぱらって怒鳴るようにこの歌を歌い続けたのはいったい何だったのか。（どんな歌なのか興味のある方はYouTubeで聞いてみてください。）

以上が私が知っている六の若いころの音楽遍歴の一端です。私は六からずいぶん音楽的刺激を受けながら青春時代を過ごしたことになります。今その思い出を綴りながら六を偲んでいます。いつぼう、ご存じのとおり六は無類の読書家、映画好き、そして洒落な文筆家でもありました。それぞれのジャンルで私が六からどれだけ感化を受けたかは測り知

れません。そのことについて語るときりがありませんのでここでは触れませんが、一つだけ記しておきたいことがあります。私がほぼ三十年前大きな人生の挫折を味わったとき、六は、これを読めとばかりに黙って藤沢周平の小説「風の果て」を渡してくれました。いい小説でした。以来私は藤沢周平のファンとなり、そのほぼ全作品を読破するに至りました。

六は五十数年にわたって私の遊び仲間であり、酒飲み友達であり、バカ話をする相手でした。私はそのかけがえのない友人を失いました。まだその悲しみの中にいますが、追悼集を発刊できることは大きな慰めです。この冊子が遺された多くの方々にとって、六を偲ぶよすがとなり慰めとなることを祈っています。六も天国で喜んでくれると信じています。この追悼集のために多くの方々から素晴らしい原稿をいただきました。最後になつてしまいました。原稿をお寄せ下さったすべての方に、編集に携わった者の一人として心から御礼申し上げます。

平成二十七年九月

(松ヶ丘病院 名誉院長)

* 本書の中には、「精神分裂病」「精神病院」といった語句も含まれており、これらは現在では「統合失調症」「精神科病院」と表現すべきですが、原稿が執筆された時代の背景等を勘案し、そのまま掲載させていただきました。ご了承ください。

(編集委員会より)

長沼六一先生追悼文集

二〇一五年九月一日 発行

編集 『長沼六一先生追悼文集』編集委員会
発行 医療法人正光会 松ヶ丘病院

〒六九八―〇〇四一

島根県益田市高津四丁目二四番一〇号
電話 〇八五六―二二―八七一

製作 大隅書店

組版 T S スタジオ

装幀 加藤恒彦

印刷 共同印刷工業

製本 藤沢製本